

J-33

東京の街にコントラストを生むことで意識を変える街の提案

The proposition in the town to change consciousness to Japanese by bearing a contrast in a town in Tokyo佐藤信治¹, ○山本淳樹²Shinji Sato¹, *Junki Yamamoto²

Currently, I feel that all criticisms are flying in Japan. Of course, there are many people who have legitimate criticism but are often oppressed by unnecessary criticism and criticism of things that are not parties, and I have strong doubts about such a society.

I think that the boundary between other persons' affairs and private affairs became ambiguous in the background of forming this society in which this criticism flew. It is not one of its causes, it is possible to interact with people who should never meet in social networking services (SNS), messaging applications, etc., red scandals that are reported like news every day, It is possible to completely interfere with other people through SNS etc. However, it is meaningless and impossible to deny the tools that have been created for convenience like these.

I believe that recognizing that people with different minds are approximate in society and that opinions and thoughts are different for this problem is to break down the current state of Japan that is critically rough. And this proposal is one of the necessary tools for that.

1. はじめに

現在,日本ではあらゆる批判が飛び交っているように感じる.もちろん,正当な批判もあるが不必要な批判によって、また当事者ではないものの批判によって虐げられてしまう人が多く,私はこのような社会に強く疑問を持っている.

この批判が飛び交う社会を形成した背景には他人事と私事の境界線が曖昧になってしまったからであると考えます.その原因は一つではなく,ソーシャルネットワークサービス(SNS)やメッセージアプリなどの流行で本来出会うことのないはずの人たちと交流できることや,ニュースで連日のように報道される政治家や芸能人の不祥事,またそれらに対し SNS などを通して全くの他人が干渉できてしまうことなどがあげられる.しかし,これらのような便利のために生み出されたツールによる弊害はすでに指摘がされている.この弊害についての議論は今更不必要であり,解決の糸口は別のベクトルから考えていく必要があると考えます.

私はこの問題に対し,考え方の違う人が社会の中にはおおよそであり意見や思考が異なることは当たり前であることを認識することが批判で荒む日本の現状を打破するものだと考える.そして,そのために必要なツールの一つが本提案である.

2. 基本方針

都市の中心に異文化の街を作ることでこの問題を解決する.

明らかにバックグラウンドの異なる人々が同じ都市の中に住むことで異文化の存在を認識する.また,その自覚により異なる文化や思想は身近に存在することを理解させる.

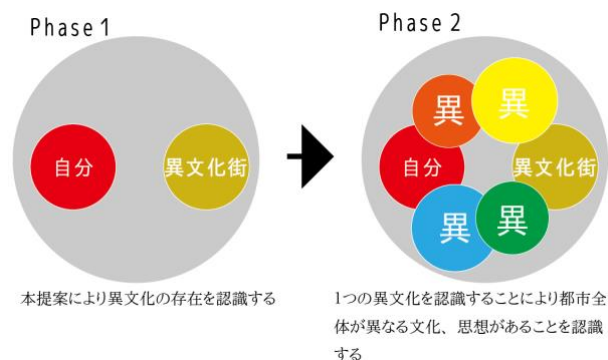


figure 1 : Order of recognition

3. 計画背景**3.1 ホームレス問題**

2020年に迫る東京オリンピックの開催に伴いホームレスに対する排除運動が起こると考えられる.平成28年度の厚生労働省の調査によると約20%が東京に住んでいる.これは「都市公園,河川,道路,駅舎その他の施設を故なく起居の場所として日常生活を営んで

1:日大理工・教員・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

2:日大理工・学部4年・海建 Department of Oceanic Architecture and Engineering, College of Science and Technology, Nihon University.

いる者」を「市区町村による巡回での目視調査」したものであるため、カラオケやネットカフェに寝泊まりしているホームレスは入っておらずホームレス状態の人口はさらに多いと考えられる。

ホームレスの人口 (H28年度)

全国	6,541
東京都	1,430
神奈川県	1,058
大阪府	1,565 ^(人)

figure 2 : Population of homeless(H28.)

3.2 インバウンド

日本政府観光局の調査による平成 28 年の訪日外客数は、2,869 万人で前年比+19.3%で推移している。こうした状況を受けてホテルの客室数不足、宿泊費の高騰が叫ばれており、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けては、東京や大阪などの都市部を中心に、およそ 4.4 万室が不足するとされており客室不足が深刻化するとされている。

4 基本計画

都市に異文化の街としてインバウンドを対象にした宿泊・観光施設を計画し、その施設の運営をホームレスの受け皿として雇用の場とする。

4.1 施設の機能

- (1) 宿泊
- (2) 住宅
- (3) 観光施設

4.2 敷地選定

以上の計画に伴い以下の選定条件があげられる。

- (1). ホームレス人口が多い地域であること
- (2). 空き地、もしくは廃墟があること
- (3). 鉄道が近くにあること
- (4). 多くの人の目に触れやすいこと

4.3 住宅の短命性

日本の住宅は世界的に見ても短命である。ヨーロッパには築 100 を超える住宅が多く見られ、また観光資源にもなっている。

短命である理由として以下のことがあげられる。

- (1) 自然災害(地震・台風)
- (2) 人口増加による急激な住宅の需要
- (3) 住宅の工業化
- (4) 築年数を基準とした評価の意識

(2)~(4)の項目は技術的な問題ではないため(1)自然災害の対策さえ行えば建築の長寿命化は可能であると言える。

5 建築計画

以上により提案を行う。敷地は先に述べた敷地条件により、バブルの崩壊で放棄された敷地が多く残る六本木周辺が適当であると考える。

建築物は超寿命化を図るため、スギ、ヒノキなどの無垢材使う。

本提案において最も重要なのが異文化性である。日本

の建築物は短命なものが多く、また築年数 100 年以上の建物の多くは社寺仏閣であるため住宅や旅館は築年数が経つだけで異彩を放つことができ異文化性を魅せることが可能である。

これらにより批判が飛び交う社会の抑制やホームレス問題、インバウンド需要による宿泊施設の不足を解決する計画を行う。

[1]<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000122778.html>

[2]<https://honichi.com/news/2017/08/17/roomdeficiencynews/>

[3]<https://chibra.co.jp/taiken/jnto-2017year-repo/>

[4]<http://honoguraiosampo.blog.jp/archives/1069940217.html>

[5] <https://marukyu-hana.com/shortlife-house/>



Figure 3 : Roma



Figure4:Ruins dotted in Roppongi